人外二人は木枯らしがお好き

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人外二人は木枯らしがお好き

【Ｎコード】
Ｎ３９６９Ｓ

【作者名】
閑野　寅歩

【あらすじ】
冬も近いある日のこと、動かない古道具屋・森近霖之助はふと人里の方へ散歩に出掛けた。諸々理由があって、あまり人里の方へは出歩かない彼だったが、今日はなんだか散歩をしたい気分だった。しかしそれはこの狭い幻想郷。人里を歩いていれば、知り合いに会う確率は当然高い。そうして彼は、見慣れた九本の尻尾を、そこで見かける事になったのだった……。※森近霖之助×八雲藍のカップリング小説です。独自設定を含みます。

（前書き）

※この小説は森近霖之助×八雲藍のカップリング小説です。苦手な方は即退却を推奨いたします。

また、藍は既に香霖堂の常連で、紫並に頻繁に来店しているという独自設定で話が進んでいます。

それでも構わないと言う方は、どうぞ。

その日はたまたま人里まで出かけていた。

なにか用事があったわけではない、しかしたまには人がいるところを散歩していってもいいだろうという気分だった。

最近顔を出していない慧音のところにあいさつに行くのもいいだろうし、気まぐれに人里散策して買い物を楽しむ。そんな普通の人間みたいなことをしてみるのも一興だろうと考えたのだ。

ひょっとしたら、霧雨の親父さんに会うかもしれない。という危惧はあったが、別段会ってもいいような気がした。あまり話したいとは思わなかったが、そうなるのも面白いかな、と思えた。

要するに、機嫌が良かったのだ。

いくら動かない古道具屋といわれても、機嫌が良くて歩き回りたい日くらいはある。

ただこの幻想郷では、人間（またはそれに準ずるもの）が歩き回れる場所が限られているだけで。歩き回れる場所が限られているということは、人見知りにあう確率がその分上がるという訳で。

或いはそれは、九つの立派な尻尾を見かける確率が上がるという訳でもあった。

「あ、」

「あら、霖之助さん」

豆腐屋の前で、にこっと笑顔を見せながらこちらにあいさつする

九尾の妖狐と出会ったのは、木枯らし吹きすさぶ秋の終わり頃であった。

「驚いたな、君が人里まで買い物にくるなんて」
「私の方も驚きましたよ、まさか霖之助さんとこんなところで会うなんて」
先ほどの豆腐屋で、手に持っている手提げいっぱいに油揚げを入れてもらったらしい藍は、少し皮肉を込めたような口調でそう言った。
見ると、藍は手提げを三つほど腕に提げており。そのうちの一つが油揚げ、もう一つも別の食材で埋まっているようだった、手提げからはみ出たネギがそれを裏付けている。三つ目には何か陶器のようなものが入っていたが、それはどこか軽そうに持っていたので、恐らく中身は空なのだろうと推測できた。
「僕だって外を歩くこともあるさ。それより、この時期に買い物とは…やはり冬前の買出しかな？」
僕は藍の言葉に少しむっとしながらも、一応は世間話を始めた。
豆腐屋を後にした彼女は、次の店を目指して歩いていたので、霖之助もなんとなしについてきていた。
歩きながらだと、自然と頭が回るので。話題には事欠かなかった。
「ええ、紫様が冬眠なされると。私は物資調達の手段がなくなってしまいますし、冬の間は人里の商店も開いていませんしね。今のうちに人里でしか調達できないものは調達しておかないと…」
私もスキマが使えればいいんですけどね。と冗談めかして彼女は言った。
「なるほど、いかに八雲といえど、冬を越すのは大変なわけだ」
ということは、藍が買っているのは冬を越すための食材か、と思って彼女の手提げをちらと見た僕は、その中に入っているものを見

て少し首をかしげるに至った。
「…冬越しの物にしては、足の速い食材もちらほら見えるけど。大丈夫なのかい？」
「え、ああ。コレとかですか？」
藍は手提げに入っていた、明らかになま物の魚を指さして言う。
「そこは妖怪の賢者と高名を轟かす紫様のことですから、どうとでもなりますよ」
「さっき君は紫が冬眠するから買出しに来たと言ってたじゃないか」
「う、まあ、そこは紫様ですから、寝ててもなんとかなるものなんです！」
なんだか深く聞かれたくなかったことのようだった、すこしむきになって返してくる。
彼女がそういう態度の時は、決まってどう答えるか困ったときだと相場が決まっていた。
ということは、何か僕に教えると不都合なことがあるということである。まあそれ以前に、僕は足の速い食材を冬の間どうやって保存するのかが非常に気になった。魚は塩漬けにすれば腐ることはないだろうか、しかしなんでもかんでも塩漬けというわけにはいかないだろう。一体どうやって…。
そうやって思考体制に入ったところで、彼女はおもむろに近くの店を指差した。
「あ、私あの店で買うものがあるので。それじゃ、今度はお店の方にうかがいますね」
そう言って僕から離れ、藍はすたすたと店に向かっていった。
が、その後ろを僕はぴったりとついていった。
店先についてふとうしろを振り返った藍は、僕がすぐ後ろにいたのに度肝を抜かれたらしかった。
「わひゃあっ！？な、なんでついてきてるんですか！」
後ろを振り向くためなのか、視界の部分だけうまくよけている尻

尾からのぞく顔が驚愕の色に染まり、まるで着替えをのぞかれたとでも言うような非難の口調で言われた。
「なんで僕がついてきちゃいけないんだい？」
「いや…だって、霖之助さんにだって用事とかあるでしょう？わざわざ人里まで来てるんだし」
「今日に限っては、ないよ」
「で、でもそれでもなんでついてきてるんですか」
「僕が君についていきたいからついてきてるんだよ」
途端に、なぜか藍の顔が赤くなっていった。
「な、ななにを言ってるんですか。わ、私はただ買い物をしてるだけですから、ついてきても何も楽しくなんてないですよぅ…」
「いいんだよ、買い物をしている君と話ができればそれでいいんだ」
「……」
「…どうしたんだい、口なんか開けてぽかんとして」
「…いえ！な、なんでもない、です！」
びくっとして、こちらの世界に帰ってきたらしい藍は、完全にあわてきった様子でそう言うと、これまたあわてて目的を思い出したようで、お店に入っていった。当然僕もついていく。
藍との問答に意識を集中していたせいか、何のお店なのかよく確認しなかったが、中に入ると店先でわずかに香っていた匂いがより鼻孔をついた。
どうやら酒屋だったようである。酒が入っているのであろう大小さまざまな壺が置かれた店内は、見方によっては大小さまざまな妖怪を封じ込めている魔法使いの家にも見えなくは無いなとか思ったが、目の前を歩く少女も妖怪なので口には出さなかった。当然といえば当然だが。
「なんとなく君が酔ったところを想像できないんだが、お酒はたしなむんだね」
なんとなしにそう言ってみると、藍は心外だという風に答えた。

「それはそうですよ、幻想郷の少女たるもの、お酒一つ飲まないでどうします。まあでも、ここで買うお酒は飲みませんけど」
「へえ？またそれはどうして？」
すこし苦笑するように笑った後、「ここのお酒は上等なので、紫様だけが飲むんです」と藍は言った。
「それは…また、」僕は何か言いたかったが、適当な言葉が見つからなかった。「でも、君も飲みたいとは思わないのかい？」
すると藍はきょとんとした表情を浮かべた。
「…はい？ま、まあそれは上等なお酒は飲んでみたいとは思いますが…」
僕は少し考えた後、「そうか」と答えた。
一つの考えが、僕の頭によぎった。
その間に、藍は店の人に注文を済ませていた。店の方も、特徴的で印象に残らないはずが無い藍の頼むものは、わかりきっている様子だった。そして藍は手提げの中からいくつか陶器を取り出した。どうやらその中にお酒を入れてもらうらしい。
「あ、あと酒かすも少しわけていただけますかね？」
彼女は店の人にそう確認しながら、それでもお酒が陶器の中に入っていくのをぼんやり眺めていた。けっこう飲みたそうにしているのは気のせいだろうか。
お酒が詰め終わった陶器を慎重に手提げに入れた後、藍は「どうも」と言って代金を支払い、店から出ようと踵を返した。
だが僕は、すぐにはその後を追わなかった。
頭の中で考えていた言葉を店の人に伝えると、僕はちらと藍が僕の行動にまだ気づいていないことを確認した。
普段から酒をたしなむ程度にしか飲まない僕にしてみれば、若干高すぎる代金を支払って、目当てのものを手にした。軽く礼を伝えた後、もう店の外に出た藍を急いで追いかける。
藍の方は、まだ店の中にいる僕の様子を店先からうかがっていた。
「やあ、待たせたね」

不思議そうな表情を浮かべている彼女に、僕はそう笑いかけた。
その視線は僕の顔から、手元へ移動し、僕が手に入れたものを確認したようだった。
「霖之助さんもここのお酒を飲まれるんですか？」
僕が持っていたのは桶に取っ手がついたような容器だった。もちろんその中には上等なこの店のお酒が入っている。いわゆる祝い酒とかで持っていくやつを一つ買ってきたのだ。
「いや、人里には滅多に来ないからね。今日初めて買ったよ」
「そうなんですか？私が言うのもなんですけど、少し高かったでしょう？」
「まあね」僕は少し軽くなった懐を自嘲するように言った。「でも、いい買い物が出来たよ。一緒に飲む人も見つかったしね」
へえ、そうですか。と藍はなぜか少しうつむき気味になった。
「一体誰と飲むんですか？やっぱり博霊の巫女や、黒白の魔法使いですか」
その質問を半ば待っていた僕は、少し間を置いて答えた。
ゆっくりと、「君だよ」、と笑いながら。
瞬間、藍のしっぽが動きを止めた。いや、もとからそんなに動いているわけではないが、思考の停止を全身で表現するかのように尻尾の動きが完全に静止し、表情も無表情で、ただその目は僕の方を向いて止まっていた。
そんなに僕の言葉が予想外だったのだろうか。
「…ま、またまたぁ、冗談を…」
藍は思考停止状態から復旧すると、軽く破顔して手を左右に振った。
どうやら本当に信じていないようなので、僕は少しむっとしながらも、続けた。
「本当だよ、君と飲むためにこのお酒は買ってきたんだよ」
「え、ええ…？ほ、本当に…？」
「だからそうだと言ってるじゃないか」

「え、でも、な、何で……？」
「君もこのお酒を飲んでみたいって言ってたじゃないか」
「そ、それはそうですけど…」
「何か、問題があるかい？」
藍はなにか言いたそうに口をぱくぱくさせていたが、すこし目を逸らして考えた後、自分に何も言えることは無いようだと悟ったらしい。
「…無いです…」
根負けしたというよりは、出されたクイズの答えがわかりません、と言っているような口ぶりだったが、問題は無いようなので特に気にしなかった。
藍は、自分のためになにかをされるということに関して抗体が無い。
そのため、誰かが彼女を思いやろうとすると、彼女はすぐに拒絶しようとしてしまう。そういう癖がある。式だから、なのかどうかはわからないが、そういう節があるのは確かだ。
しかしそれでは、あまりに藍がかわいそうである。
他者の好意を受けることも出来ないなど、生き物として悲劇と言って差し支えないだろう。
そもそも彼女は九尾の妖狐だ。人に恐れられこそすれ、思いやられることなどなかったのかもしれない。
だがそれが、彼女を思いやる必要がない理由にはならない。
すこしぐらいおせっかいを焼いてあげてもいいじゃないか、と思う。
何せ今日の僕は、機嫌が良かった。
「それ、持とうか」
僕は藍が抱えている手提げのうち、食材がたくさん入っているものを指して言った。
「え、」彼女はまたびっくりしたような声をあげ。「いいですよ！そんなに重く無いし…」

「いや、持とう。一組の男女が歩いていて、女性の方が多く荷物を持っていると言うのはどうかと思うしね」
「私は妖怪ですから大丈夫なんです！」
「それだと僕も半分妖怪だから立場は対等だよ」
「も、もぉー！今日の霖之助さんはどうしたんですか！」
藍はまるでだだをこねる子供のような仕草で叫んだ。
そこまでむきになるもんかな、と思った僕がふと彼女の表情を見て、ぎょっとした。
「…？あ、あれ。あれれ…？」
どうやら藍のほうも僕の表情で初めてそれに気づいたようだった。
少し怒ったような表情から、みるみるその顔が驚愕の表情へと変わっていく。そしてその瞳からは――。
一筋の涙が、ほおをつたっていた。
「あれ…な、なんで、わたし…これ……」
顔の涙をぬぐおうとするが、食材が満載された手提げを両手に抱えているのでぬぐえない。僕は黙って彼女の手から手提げを奪った。
そして、空いた手で素早く顔を覆った彼女を黙って見守った。
いや、かける言葉が見つからなかった。
目の前で、女性に泣かれた経験なんてもちろん無いし。
そもそもどうして泣かせてしまったのか、それどころか、僕が原因なのかすら分からなかった。
「うっ…ひぐっ……う、うぇえええん」
さらに困ったことに、顔を覆った彼女は涙を拭いてすぐに復活するかと思ったら、顔を覆ったまま、さらに激しくなった嗚咽が聞こえてくるのであった。
というか、音から判断して完全に泣き出していた。
どうすればいいのか、と途方にくれた僕であったが、ここは人里。こんなところで泣かれては人の目に付くどころの騒ぎではないと気づき、なんとかしようと藍に近づいた。
「大丈夫かい？一体どうしたんだ？」

この状況下、気の利いたことも言えない自分が腹立たしいながらも、なんとか声をかけた。
「ひっ…ひぐ…わ、わからないんです…急に、涙が出てきちゃって…うっ…止まらなくて…」
藍は、袖で涙をぬぐいながら、僕を見るため顔を上げた。その表情は泣きじゃくった子供のようであり、涙がたまって潤んだ瞳は、これ以上無いほどに美しく見えた。
普段毅然として冷静な彼女の態度を見ているだけに、こんな弱々しい表情を見るのはあまりに珍しいことだったので、僕は不覚にも心を動かされた。
「とにかく、立ったままこうしてるのもよくないだろう。そこの茶屋で休もう。ほら、行こう」
店の前にいくつか長椅子を出しているタイプの茶屋を都合よく見つけた僕は、とにかく藍をそこに落ち着かせようとした。往来のど真ん中で泣かれては目立つにも程がある。というか、ただでさえ藍は目立つのだ。
だが、そうして藍を催促し歩き出そうとした時だった。
右袖のあたりを引っ張られる感覚があり、僕はそれが藍が引いているのだと気が付いて何事かと振り返った。
すると、心なしかさっきよりも弱々しい様子になった藍が、僕の右袖をつまんでちょいちょいと引いていた。
その仕草に、昔、修行していた店で面倒を見た子供を思い出したが、その話はまたおいておく。
「…どうした？」
うつむいて、顔を真っ赤にしているらしい藍に、尋ねた。
「…ご、ごめんなさい…」藍はすごく申し訳なさそうな口調で。
「な、なんか。心細くなっちゃって……」消え入りそうな声で、そう言った。
僕は、少し考えた後。彼女から奪った手提げのうち一つを肩にかけ、残り二つとさっき買ったお酒を、かなり重いがまとめて持った。

そして、空いた方の手を、彼女の前に差し出した。
うつむいていた彼女にもその手が見えているはずであったが、なぜか握ろうとしないので、僕の方から彼女の手を取った。「ひゃっ」と短い吐息を彼女は漏らしたが、何も文句は言わなかった。
そのまま茶屋まで引きずるように手を引いて行き、怪訝そうな顔をしている茶屋の娘に「草もち、二個たのむ」と手早く注文し奥へひっこませた。
赤い布の敷かれた、ベンチのような長椅子にまず藍を座らせ、荷物を置いてから僕もその隣に腰掛けた。
見れば、藍はもう涙を流してはいないようだったが、それでも短い嗚咽が定間隔で漏れ出していた。
僕は横で、黙ってその様子を見つめていた。
店の娘が注文された草もちを持ってきても状況は変わらなかった。相変わらずこちらを怪訝な表情で見てくるその娘に、最初は不審感を持ったものだが。考えてみると見るからに妖怪の少女が泣いてて、その隣にどう見ても人間にしか見えない男がいるのだからそれは怪訝な表情でのぞきたくなるのも道理というものだ。
「……食べるかい？」
ひとまず、お互い黙ったままもどうかと思ったので草もちを指してそう打診したのだが、言った後でこれはない、と後悔した。当然、藍は力なく首を横に振った。
が、僕もこれ以上の策も無いため。結果的に再び沈黙が訪れただけだった。
見ると、彼女はもう嗚咽も、涙も止まっていたが、うつむいて自分のひざを見つめていた。その表情は、陰鬱として暗い。
そこで僕はふと気が付いた。
ここまで連れてくるときに引いた彼女の手は、まだ僕が握ったままだった。
あっ、と気が付いたが。手を離そうか、と聞く空気でもなかったため、静かにそっと離そうとその手の力を抜いた。

すると、その手から力を抜くのと反比例して、その手が強く締め付けられるのを感じた。
驚いて手を見てみると、するりと抜けるように手を離そうとしていた僕の手を、藍の手が握り締めていた。
彼女の顔はうつむいたままだったが、その手は強烈な意思表示をしていた。
「…わかったよ」
僕はぶっきらぼうにそう言って、抜こうとしたその手で再び藍の手を握った。
「霖之助さんは、」
そこで唐突に声がした。
「えっ？」
「霖之助さんは……誰にでもこんなに優しいんですか？」
うつむいたままの藍がとつとつとつぶやいた。
僕はその質問の意味を図りかねたが、意図を図っても自分は気の利いた答えなどできるわけがないと思い当たったので、正直に答えた。
「一応、人妖だしね。妖怪にも人間にも分け隔てなく接してるつもりだけど」そこで言葉を切って少し考え、霊夢と魔理沙の顔を浮かべてから。「優しくするのに値しない奴もいるから、あんまり優しくはしてないな。紳士的に振舞ってはいるつもりだが」と付け足した。
「じゃあ、私は値するんですか？」
直後、藍の問いに。
「もちろん」
とうなずいてみせる。
「な、なんで…」
ほら、またである。自分に向けられる言葉にはすぐ拒絶したがって、その理由がわからなくて理解できない。彼女が「なんで」と問いたいのは、かけられる善意の理由ではなくて、善意を正直に受け

取れない自分自身へなのだろう。
それが分かっていない彼女には、今はどんな言葉も意味を成さない。
言葉の上で解決しようとするあまり、迷路にはまってしまっているのだ。それも、出口など無い迷路に、始めから出られるはずもない迷路に。
だから僕は、彼女の顔をこちらへ向けさせた。
片方の手は彼女の手を握ったまま。
まだ涙をたたえたように潤んでいるその瞳は、僕の顔をその目いっぱいに映し出していた。金色の髪が、さらさらと視線の上の方を流れているのを見た。起こったことを把握できず、さらに大きく見開かれたその目が、たたえていた涙をこぼした。彼女が、手をさっきよりも強く握り締めるのを感じた。
「――――ッ」
僕の顔は彼女のすぐ前にあり、そしてさっきまで押し問答を繰り広げていた口は、お互いに密着してお互いを塞いでいた。
そして少しの間その状態を維持した後。僕はゆっくりと離れた。
藍は呆然とした表情で僕の顔を見、その目からはこらえていた涙が一筋ほおを伝っており、肩からは力が抜けていた。ただ、僕の手を握る力は、さっきよりもずっと強かった。
抗議しようとしたのか、口を意味無く開けて、言葉無く固まっている彼女に、僕は用意していた言葉を言い放った。
「…僕が君を好きだと言えば、それで問題ないのかな？」

それから後のことは、実を言うとあんまり思い出したくない。
僕のその言葉を聞いた後の藍は、また、わっ、と泣き出したかと思うと、僕に飛びついて、抱きついた上でわんわん泣いた。
なんだ、どうして泣くんだ。接吻が嫌だったのか？そうだとしたらすまない。というか本当にどうしたんだ大丈夫か。と訳もわから

ず僕が理由を尋ねると。藍は子供のように泣きじゃくりながら、おおむね次のようなことを泣き叫んだ。

「だって、だって霖之助さんが荷物持ってくれるとか、私なんかと一緒にお酒飲んでくれるとか、そ、そんな優しくされたことないのに言うから、なんかうれしすぎて涙でちゃって、それも心配してくれて、それも手を引いて誘導してくれて、心配して見守ってくれて、私を少しも責めないし、それで、それでなんでなんでって思ってたら、り、霖之助さんが、ち、ちゅーしてきて、わけがわからなくなっちゃってるのに、わ、わたしが好きなんていうから、そんなこと言うから！うわぁあああん！霖之助さんのばかぁー！（以下略）」

結局その後の言葉はほとんど僕に対する愚痴のようになって、具体的に泣いている理由がつかめなかったのだが。九尾などという大妖怪を泣き止ませる方法などを知っている道具屋がこの世にいるはずもなく。当然僕もしらないので結果的に藍が泣き止むまで、僕の体は藍の抱きつき締め付けばかと言われながら叩かれるのに任せるしかなかった。

当然、往来の注目を集めまくったのは言うまでも無い。霧雨の親父さんがこの騒ぎを聞きつけて来なかったほうが不思議なくらいだ。

それくらいの見事な泣叫びっぷりを見せた藍が落ち着いた後、迷惑をかけた茶屋の娘さんに、おわびもかねて団子をいくつか頼んだ。茶屋の娘さんは、謝る僕に苦笑いしながら、いいですよ、と言ってくれた。心根の優しい娘さんでよかった。藍の方は真っ赤になりながら頭を下げまくっていて、その顔を見ることも出来なかったようだが。

「……すいませんでした」

みたらし団子を一人三本ずつ、それと来てから大分経った草もちをほおばりながら、藍は本気で申し訳なさそうに言った。

「あんなこと、式をつけられてから言われたこと無くて…長いこと、誰かに優しくされるなんてことがなかったのでつい…」

「取り乱した、と？」
「……面目ないです」
「まあ、別にいいけどね」
「いえ！しかしそれでは私の方が示しがつきません！」
「示しか…、それはなにかしてくれる。ということかな？」
「お詫びということでなら、何でもします！」
「なんだ、」僕はごく簡単なことを言うように。「だったら君の答えを聞いてないな」
「へ？」
首をかしげ、何のことだがわからないという様子の藍に。
「僕は君のことを好きだと言った、君は？」
きょとんとして、草もちをくわえたまま固まった藍は。みるみる顔を赤くした。
「な、えっ、そ、だ、だってそれは…もう…」
慌てて草もちを皿にもどすなり、動揺しすぎとしか言いようの無い動作と口ぶりで、藍は祈るように僕を見つめた。僕はその様子を、意地悪く笑いながら眺めて、言った。
「ちゃんと言ってくれないとわからないよ、君は、僕のことをどう思ってるんだい？」
一瞬の間。
その間に藍が百面相をしたのを見届けた後、僕は弱々しくつぶやかれたその言葉を聞いた。
見える肌の部分がすべて真っ赤になった彼女があまりに弱々しくつぶやいたので、その様子のほうがおかしくて言葉のほうをはっきりと覚えていないのだが。
それは僕を満足させる言葉であったことに、間違いは無い。
しかしこれから色々とやっかいなことがありそうだとふと思ったが。
それもいいかな、と思えた。
なにせ今日の僕は、機嫌がいいのだから。

震えるように寒い木枯らしも、二人で笑い飛ばせば、問題ない。
なによりもあたたかい二人がいるのだから、寒くなどなるはずは無い。
秋の終わり、それは木枯らしが何かを祝福するように吹きすさぶ、そんなある日の話だった。

（後書き）

藍霖です。僕からしてみれば平常運営です↑

しばらく藍霖に限らず、カップリングを書けていなかったので、何か書きたいなぁと書いてみたら藍霖でした。いつも通りですね、ええ。

最初は普通にお散歩デートみたいな話を想像していたんですが、霖之助さんに攻めさせる方向に急転換しました。急転換したということは、かなり無茶な話展開だったりするということです。すいません。

藍様のキャラが違うよ！って言われるかもしれませんが、僕としては藍様は想定外の事が起こると錯乱して泣きだしたくなっちゃうキャラだと勝手に決め付けています↑　まあいずれにせよ、かわいい藍様が好きなので、かわいく混乱していただこうと。普段聡明そうな人が錯乱してると、怖いけど一縷の可愛さがあふれてる気がします。

まあそれ以外にも、二人が初期状態で両想いだったりとか、圧倒的に都合のいい設定だらけですが、これが俺の藍霖なんだ文句は言わせない（（

こんな勝手な気持ちで勝手に書いたお話ですが、もしも楽しんでいただけた方がいらっしゃれば幸いです。

拙作を読んでいただき、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3969s/

人外二人は木枯らしがお好き

2011年10月7日00時32分発行